広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第56号　2007　141－145

文学教材におけるプロットの利用

中　村　愛　人

（2007年10月４日受理）

Effectiveness of Plots in Defamiliarizing Literary Texts as Teaching Material

Yoshito Nakamura

Abstract. Stories and plots are fundamental elements of a novel and a short story. Because they are so fundamental, we tend to think little of them compared with other elements, such as characters and points of view. From a standpoint of teaching and learning materials, however, plots are not negligible at all. On the contrary they are effective in defamiliarizing forms and expressions to which they are related and giving us chances of learning a language. In this paper we examine how the plots function in two short stories and how they are treated in the adapted versions in high school English textbooks.

Key words: plot, story, defamiliarization, literary material
キーワード：プロット，ストーリー，異化，文学教材

１．はじめに

文学作品，特に物語的作品を読む際の大きな楽しみは，その筋の展開を楽しむことであろう。次には何が起こるだろうか。なぜそんなことになってしまったのか。彼女はこの後どうなるのだろうか。読者は，このような緊張感や期待感のうちに，それらの解決を求めて先を読み進める。それは，探偵小説とか推理小説などに典型的に見られるものである。人物の性格描写や心理の動きや表現の綾などの楽しみと比較すれば，極めて基礎的な楽しみであるが，目的を言葉の学習のための文学教材と考えた場合，皆が同程度の文学の読みの経験があるわけではなく，好みも違い楽しみのレベルも様々であろう。それだからこそ，基礎的故に多くの学習者にある程度共通の楽しみとして利用できると考えられる。

２．ストーリーとプロット

この話，物語の筋と一般的に話題にされる場合，意外とその意味が曖昧に使われている。この筋に相当する用語としては，ストーリー（story）とプロット（plot）がある。それぞれがどのように使い分けられるべきなのかを見るために，先ず，E. M. Forster（1879–1970）の古典的定義を取り挙げよう。

Let us define a plot. We have defined a story as a narrative of events arranged in their time-sequence. A plot is also a narrative of events, the emphasis falling on causality. “The king died and then the queen died” is a story. “The king died, and then the queen died of grief” is a plot. The time-sequence is preserved, but the sense of causality overshadows it. Or again: “The queen died, no one knew why, until it was discovered that it was through grief at the death of the king.” This is a plot with a mystery in it, a form capable of high development. It suspends the time-sequence, it moves as far away from the story as its limitations will allow. If it is in a story we say ‘and then?’ If it is in a plot we ask ‘why?’ That is the fundamental difference between these two aspects of the novel.[1)]

これは，明確で巧みな定義であり，そのためかよく引き合いに出されるものであるが，両者を同一線上に並べ，出来事を年代記的順序に並べたストーリーと因果性に重きを置いたプロットとしてはっきりと質的に区別している。この定義によると，簡単なお伽噺や民話

は前者，現代の小説などはほとんど後者になってしまう。しかし，少し違った意見も見られる。

ストーリーとプロットを明確に区別することはできない。両者の違いは質的なものではなく程度の差である……プロットとは因果関係のしっかりした，出来映えの見事なストーリー－劇的プロットのことである。人生には無関係なことや無駄が山ほどあるという意味において，人生から直接得られるのはストーリーであって，プロットではない。従ってプロットを作り上げ，人生において始まった行動を完成に至らせるのが作家の課題である[2)]。

ここでは，両者の違いは程度であり，因果関係をうまく組み込んだ優れたストーリーがプロットであること，そして作家が関わるのがプロットであることなどが新たに言われている。

小論では更に進めて，ロシア・フォルマリズムや物語論（narratology）で言う定義を採用する[3)]。即ち，ストーリーとは起こった時間順に並べられ出来事の全てを含んだ（仮定上の）もとの物語であり，プロットとは出来事が語られる順序も含めて実際の作品として再構成されたものとする。ストーリーは作家の手を待つ生の素材であり，そこにはプロットに含まれないそれ以前の出来事や欠落部分も存在し，読者はプロットを手掛かりとしてそれを連続する全体に作り上げる。このような区別を採用すれば，作られた物語は全てプロットと言うことになる。例えば，素朴な民話のような物語の場合，そのプロットはほぼ時間順に沿っていることもあり，ストーリーに極めて近いものになっているが，他方，本格的な小説では，目差す効果を最大限に上げるために作家が出来事の順序を入れ替えるなど工夫を凝らし，プロットとストーリーはかけ離れたものになる可能性が高い。

3．プロットと異化

私たちの意識は，このストーリーのように時間順に配列された物語を期待する，言い換えれば，最終的にそういう配列に構成し直して理解しようとするのではないか。ところが，小説などにおいてはどこかでその期待が裏切られる。そこに抵抗と緊張が生まれ，改めて注意を集中して読み進め，場合によっては一旦元に戻ることにもなる。上で言及した E. M. Forster が，プロットを理解するにはストーリーを楽しもうとする好奇心（curiosity）だけでなく記憶力（memory）と知性（intelligence）が必要だと指摘しているのも頷けるであろう[4)]。そして，フォルマリストは，しばしばこのプロットの理論と異化（defamiliarization）の概念を結びつける。つまりプロットは出来事を良くある見慣れたものと見做すことを妨げるものであると言う[5)]。少なくとも小説に必ず存在するプロットという基礎的な楽しみの要素が，私たちの意識と注意を高め，それを形式・表現へと向けさせることは間違いないであろう。

そこで小論ではこのプロットの異化作用が言葉の学習に有効だとして，実際に作品において検証を行うことにする。

4．作品の検討 1

文学教材と言うことで，高等学校の英語教科書に取り上げられている作品を選んだ。始めは，イギリスの作家ロアール・ダール（Roald Dahl）（1916-1990）の短編小説で“The Landlady”[6)]。ダールは，ノルウェー人の両親を持ち，イギリスのウェールズで生まれ，イングランドのパブリックスクール Repton School を卒業した。彼の作品は，その巧妙な話の展開と結末の意外性，少しばかりエロティックな妙味もあり，冴えた描写力と相俟って多数の読者を魅了してきた。また一方では，自分の子供たちに作った物語をきっかけとして生まれた児童文学作品がある。夢を育むような心暖まる物語に black humour 的色彩を加味したもの，才気あふれる造語を駆使したものなど文句なしに楽しめる作品が多い。ここで取り上げた作品は，前者の *Tales of the Unexpected*（1979）中の一篇である。

先ず“The Landlady”のプロットをまとめよう。

①17歳の若者ビリー・ウィーヴァー（Billy Weaver）はロンドンから列車でスウィンドンを経由してバース（Bath）へやって来ていた。もう午後 9 時頃で外は寒かった。ポーターに近くの安いホテルを教えてもらいそこに向かった。彼は，②仕事で派遣され，バースは初めてだったが，③キビキビと行動することこそ成功の秘訣だと考えていた。④さびれかけた暗い街を歩いて行くと，明るく照明された BED & BREAKFAST の看板が目に留まり，窓から中を覗くと，暖炉に火が燃え，薄暗い中に感じのいい家具が揃い犬やオオムが見えた。ペットがいるのは良い宿の印だと彼は思った。一方で⑤それまでこのような宿に泊まったことも無く，やはりパブの方が良いのではと思い直し，先ほど教えられたホテルへ行こうとした時，目の前の看板の文字が魔法のように彼を捉え，彼は，我知らず玄関の呼び鈴を押してしまった。途端にパッとドアが開いて宿の女主人が現れた。45～50歳くらいの愛想のいい女性で，彼はたちまち招きいれられた。少しずつ事情を話して料金も思いがけないくらい安いことがわか

り，彼は泊まることにした。ホールには，他に帽子もコートも傘なども無かった。他の客がいないことを，彼女は，自分が幾分気難しくてえり好みしているせいだと説明した。二階は女主人，三階は彼が泊まる部屋で既にきちんと準備ができていた。女主人は少し頭がおかしいようにも思えたが彼は気にせず，荷物を出してから宿帳に記帳するため階下に下りた。彼女はいなかったが宿帳があったので，彼は名前と住所を書いた。宿帳には以前の宿泊客は二名しかいなかった。⑥二人とも，思い出せないがどこかで聞いた名前だった。そこへ彼女がやってきて，その二人について話が始まった。⑦二人とも背が高くンサムな若者で，宿帳では一人は二年以上前，もう一人は更にその一年位前の宿泊客になっていた。彼には二人が何か共通のことで知っているように思えたが，彼女は適当にあしらうだけだった。彼は少しずつ思い出した。一人はイートンの生徒で徒歩旅行の途中で……と言いかけたところで彼女が口を挟んできて，⑧彼は大学生だったから違うと言った。彼は，促されるままに彼女と同じソファーに座り，お茶を飲んだ。彼女は彼の様子を窺っていた。彼女からは皮とか病院の廊下のような匂いがしていた。彼は二人の名前を新聞の見出しで見たと確信した。ところが女主人は，二人がまだこの宿にいると言った。年齢の話になり，彼は17歳で⑨二人のうちの一人も同じ17歳だったこと，もう一人は28歳で体には傷のようなものが全然無くて赤ん坊の肌のようであったことなどを彼女は話してくれた。彼は，かごのオウムが剥製だとようやく気づきその話をすると，犬も剥製で，彼女が処理をしたのだと教えられた。更にお茶を勧められたが，苦いアーモンドのような味がして断った。二人の後で他に宿泊客があったかと訊くと，彼女は，あなただけだと答えた。

少し長くなったが，以上がこの作品のプロットをまとめたものである。

次に，この作品のストーリーはどのようになるであろうか。重複が多いのでプロットとずれている部分（○で囲んだ数字の部分）だけを取り出すことにしよう。①～⑥は過去完了形で表現され，⑦～⑨は過去形で表現されたものであるが，前者は地の文の叙述であり，後者は宿の女主人の話す言葉で，どちらも物語の現在よりも以前のことに言及している。

①は，主人公のビリーが事件の起こる現場に着いたところから作品が始まることにして，そこまでの過程を一気にまとめて述べている。冗長さをなくし注意を集中させる書き出しと言えるだろう。②と③の部分は，彼についての背景的説明で，一続きで述べられている。②は，これまでの経緯として，彼が仕事でバースの町に派遣されたこと，この町を知らないことで，何かが起こってもおかしくないことをさりげなく伝える伏線の一つである。③も，彼がキビキビと行動することを日頃からの信条としており，どんどん窮地に陥って行く伏線となっている。④は，かつては賑わいを見せていたらしいが，今は寂れかけ古び行く街の様子を伝える描写。人通りも少なく怪しげな家があってもおかしくない雰囲気。⑤では彼が以前に泊まったパブのこと。ビールや遊びや多くの宿泊客たちの存在と彼が今から宿泊することになる宿－３年間でたった二人の客－との対比。⑥は，以前にこの宿に泊まった客のこと。どこかで聞いたことがある名前なのだが彼には思い出せない。しかし，変わった名前ということからもその記憶はあながち間違いではないことが仄めかされている。⑦女主人の話す以前の客のこと。彼女が，前の部分で，客として「すてきな若い紳士（an acceptable young gentleman）を選んでいるので客が少ない，と説明していたことと見事に符合する。考えれば，そこまで客のえり好みをするのは不自然で，何か他の理由があるはずだと思わせる。しかし，ビリーは，彼女の他のことも含めて少し頭がおかしいと思っただけであった。⑧は，彼女が，ビリーが思い出した新聞の事件のことを否定するために嘘を言った，あと一歩のところで不信感を抱かさないように取り繕ったということであろうか。⑨に至って傍目には当然怪しいとわかるはずだが，当事者のビリーは気付かない。彼はいつ気付くのか，もう手遅れなのか，という読者の緊張感の高まり。

これらが，この作品のプロットとストーリーの主要な相違点である。つまりこの物語は，１．バースの町に異常な性癖を持つ女がいて，好みの動物を剥製にしてコレクションしているまでは良いが，宿を営んで機会を狙い，美形の若者にまで手を出している。一方ビリーと言う余り世間を知らない，しかし成功を目差す17歳の若者が仕事でバースに派遣される。２．ビリーは，バースの町でふとしたことから彼女の宿に行き当たり，どんどん深みにはまり彼女の罠に落ちてしまう。ストーリーでは１から２へと一続きの話であるが，プロットは２の途中に１の部分が必要に応じて小出しにされて挿入される形になっていて，大体背景的な説明をし，事件が起こる雰囲気も含めて伏線を構成している。このプロットによって，読者にストーリーのままでは得られない緊張感が生まれ，不安と悪い予感のうちに結末に至り，ある種の驚きや開放感や感動さえ覚えることになる。

この作品は，短編小説であり，短い中に目まぐるしく現在と過去が交錯する余地などはないであろう。過

去の説明は，背景的なもの，雰囲気を伝えるもの，なるべくしてなったのだと納得させるものなど，総じて伏線として働いていて，作品にとっては重要な要素となっている。

更に言えば，これらの部分に出会う時，つまりプロットの異化作用により，特に注意が喚起され表現や叙述へと集中することになる。言葉・表現への意識の高まりと言っても良い。そこに言葉の学習の可能性があると考えられる。

5．教科書版の検討１

次に教科書に教材化されて入れられている同じ作品と比較検討してみよう。

教科書版では，SUPPLEMENTARY READINGとしての位置づけになっていて，原作の味わいを残そうとしているが，全体としては，かなりの書き換えや省略がされている。特に始めの４分の１位が省略されて日本語での粗筋となっている。始まりは，ビリーが玄関のベルを押すところからである。つまり，①～⑤はないが，宿に泊まることにしてからの⑥～⑨は残されている。この作品には，既に指摘したストーリーとのずれである伏線的叙述以外にも様々な伏線が散りばめられ効果をあげていて，注意して読めば非常に面白い作品に仕上がっているので，始めのまとまった省略は残念であるが，長さを考慮すると致し方ないであろうか。⑥～⑨が，それなりに言葉の学習に注意を促し，役立ってくれると思われる。

6．作品の検討２

次に，20世紀イギリスの作家で，story-tellerとして高い評価を受けているモーム（William Somerset Maugham）（1874-1965）の作品“The Luncheon”[7]を取り上げよう。モームはマイナーな作家と見做されがちであるが，巧妙な筋立てを駆使し，劇的な人間模様を描き出し，しかも面白い作品に仕上げる力量を発揮した作家である。

“The Luncheon”のストーリーは，主人公は若い駆け出しの貧乏作家で，或る時ファンの中年女性から会って話をしたいと言う手紙をもらった。それに応じた彼は，高級レストランで食事をご馳走することにした。彼は，見分不相応ながら，女性ファンの手前，見栄を張ったのだ。しかし，口では余り食べないと言いながら，次々と料理を注文する彼女に，はらはらし通しであったが，何とか支払いを済ませて彼女と別れた。20年後に彼女と偶然再会するが，見事な肥満体で，名前を聞かなければわからないほどの変わりようであった。彼は，思わず心の中で快哉を叫んだ。

この作品のストーリーとプロットの関係は単純で面白い。作品の「初め」と「最後」の部分が20年後の現在となっていて，「中間」の部分が過去の二人の会食の場面で作品の大部分を占めている。つまり作品の現在を枠のように使って作品を構成している。しかし，どちらも現在と言ったが，作品の「初め」は「最後」より前である。20年後に初めて出会った場面が「初め」で，その後それをきっかけに振り返って総括しているのが「最後」であり，若気の至りと言ってもいい見栄を張る主人公と，口とは裏腹な振る舞いの女性との一幕を，皮肉を効かせつつ幾分覚めた目で真理を語るがごとくまとめている。ここでの両者のずれは，前の作品とは違って，「前」と「中間」はどちらも過去形が基本となっていて時制の区別はなく，内容から読み取らなければならない。「最後」は，これに対して現在形を基本として書かれて区別がなされている。いずれにしても，この三つの部分をまたいで読み進む時，表現に注意を払い，時制と内容や文脈などの情報を参照して読み分ける必要がある。

7．教科書版の検討２

この作品の教科書版として２種類の版を比較してみると，（A）はかなり省略や書き換えが多く，もう一方（B）は時折省略がある位でほとんど原文のままであった。両者とも「初め」から「中間」は問題なく続いていたが，変更の多いAの方は，予想通り「最後」にも変更がなされ，かなり省略されている。そうは言っても，それなりに残された部分もあり，皮肉の効いたまとめにはなっていて，許容される範囲であろう。

8．おわりに

小説などの基本的な楽しみであるプロットについて，言葉の学習と言う観点から二つの作品を検討した。教科書に入れられる作品ということで，短編小説２篇を選んだ。どちらの作品もその面白さがプロットによるところの大きい作品で，今回の検討に適したものであると判断したが，短篇小説ゆえの限界もあり，それ程複雑な様相は見られなかった。改作された教科書版においても，比較的原作の良さを残しており，プロットの働きも損なわれていなかったように思われる。

小説や物語的作品において，プロットを楽しむのは極基礎的なものであるが，言葉の学習と言う観点からすると，決して軽んじるべきことではない。私たちが

そのような作品を読む時，無意識に期待している時間的順序での語りが破られる時，まさにその時にこそ，言葉を意識し，様々なレベルで表現に注意を払うという学習の機会がもたらされている。

教科書版に改作する際も，このプロットを大事にし，その効果をできるだけ損なわないようにするべきであろう。

【注】

1）E. M. Forster, *Aspects of the Novel*, Edward Arnold Ltd., 1969. pp.82-83
2）レオン・サーメリアン著　浅田雅明他訳，『小説の技法－視点・物語・文体－』，旺史社，1989，p.164
3）川口喬一，岡本靖正編，『最新文学批評用語辞典』，研究者出版，1998，pp.154-155
4）E. M. Forster, pp.83-85
5）ラマーン・セルデン著　栗原裕訳，『現代文学理論』，大修館書店，1989，pp.26-27
6）Roald Dahl, The Landlady，開文社出版，1988 で原作を参照。改作された教科書版は，*Genius English Readings*, revised edition, “The Landlady”，米山朝二他，大修館書店，1999 を使用した。
7）William Somerset Maugham, “The Luncheon”，成美堂，1999 で原作を参照。教科書版は，A. “The Lunch”，斎藤武生他，*OAK ENGLISH II*，開拓社，1998 と B. “The Luncheon”，高梨健吉他，*PRACTICAL ENGLISH COURSE II*, revised edition，池田書店，1990 を参照。